

2023年度（第48回）学術研究振興資金 学術研究報告

| | | | |
|-----------|---|-------|------------|
| 学 校 名 | 上 智 大 学 | 研究所名等 | イスラーム地域研究所 |
| 研 究 課 題 | 現代イスラームにおける公共性再構築をめぐる 動態の研究 | | 研究分野 文 学 |
| キ ー ワ ー ド | ①イスラーム ②諸宗教 ③地域研究 ④公共性 ⑤融和 ⑥対立 ⑦共生 ⑧多元性 | | |

○研究代表者

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 | 役 割 分 担 |
|---------|------------------------------|-----|---------|
| 赤 堀 雅 幸 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 教 授 | 総括、人類学 |

○研究分担者

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 | 役 割 分 担 |
|-----------|------------------------------|-------|------------------|
| 阿 部 る り | 上 智 大 学 文 学 部 | 教 授 | ドイツ、トルコ担当、メディア研究 |
| 稲 葉 奈 々 子 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 教 授 | フランス、日本担当、社会学 |
| 岩 崎 え り 奈 | 上 智 大 学 外 国 語 学 部 | 教 授 | マグリブ担当、社会経済学 |
| 久 志 本 裕 子 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 准 教 授 | マレー世界担当、人類学 |
| 澤 江 史 子 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 教 授 | トルコ担当、政治学 |
| 辻 上 奈 美 江 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 教 授 | マシュリク担当、社会学 |
| 東 長 靖 | 京都大学大学院 アジア・ アフリカ地域研究研究科 | 教 授 | トルコ他担当、思想研究 |
| 山 口 昭 彦 | 上 智 大 学 総 合 グ ロ ー バ ル 学 部 | 教 授 | イラン担当、歴史学 |
| 湯 浅 剛 | 上 智 大 学 外 国 語 学 部 | 教 授 | 中央アジア担当、政治学 |
| | | | |

現代イスラームにおける公共性再構築をめぐる動態の研究

1. 研究の目的

- (1) 近代市民社会を構成する大きな要素の一つである「公共性」を鍵概念として、イスラームと現代社会の双方について理解を深める地域研究の実践を目指す。
 - ①イスラームに伝統的に別種の公共性が備わっていたのかを問う。
 - ②ヨーロッパ的な公共性の受容の過程を問う。
 - ③現代においてイスラームの公共性はどのように再構成されつつあるのかを問う。
- (2) 1990年代後半に柔軟な地域研究として構想され、国内研究機関の連携によって継続されてきたイスラーム地域研究を継承し、新たに展開する。
 - ①ムスリムが少数派として生きる地域にも目を向け、各地域の事情を精査しつつ、同時代を生きるムスリムたちの共通性と多様性を、総体として理解するよう努める。
 - ②グローバル化の波のなかを生きるムスリムたちの間に、私たちと同じように内なる葛藤や多様な方向性があることを認め、彼らの公共性再構築への動きと、私たち自身のそれとを相互に参照し連動させ活かす方を検討する。
- (3) カトリック大学でイスラームについて研究することを自覚し、研究を宗教理解促進や宗教宗派関係の調和的展開に活かせるよう、他の研究機関と連携した活動を展開する。
 - ①2022年度新設の上智大学イスラーム地域研究所 (Institute of Islamic Area Studies, SIAS) の最初の共同研究として本研究課題に取り組み、併せて研究所の機能の充実を図る。
 - ②本研究の各種取り組みについて、他の学内11研究所との積極的な協働を図る。
 - ③イスラーム地域研究以外に存続する唯一のイスラーム地域研究拠点である京都大学イスラーム地域研究センターおよび同大学ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センターと、これまで以上に積極的に連携する。
 - ④これまでも連携してきた海外研究機関（トルコのウスキュダル大学スーフィズム研究所、フランス国立社会調査センター宗教社会ライシテ班など）との研究連携を強化する。

2. 研究の計画

- (1) 研究班の連携を緊密にして、各班での研究会等を実施する。
 - ①2022年度に確立した三つの研究班に、より多くの研究協力者の参加を促す。
 - ②各班が研究会を複数回実施し、可能なら研究合宿も行う。
- (2) 新型コロナウイルスの流行を脱しつつあることから、現地調査の活発化を図る。
 - ①各班で研究分担者等の個別調査を実施する。
 - ②いずれか1班による共同調査を実施する。
- (3) 学内外、国内外研究機関との連携によりワークショップ等を実施する。
 - ①海外研究機関と連携して国際ワークショップを1件以上開催する。
 - ②学内外研究機関とも連携してワークショップ等を開催する。
- (4) 公開講演会等を開催して研究の周知と成果の還元を図る。
 - ①上智大学が研究成果を広く公開する機会であるSophia Open Research Weeks (SORW) に積極的に参加する。
 - ②その他、講演会、解説付き映画上映会などを実施する。
- (5) 研究成果の国際会議での発表や成果物の刊行を積極的に進める。
 - ①第6回中東研究世界大会 (World Congress for Middle East Studies, WOCMES 2023) での部会発表を実施する。
 - ②論集SIAS Occasional Papersを刊行し、本研究の成果をここで発表する。
 - ③講演録SIAS Lecturesを刊行する。
- (6) 本研究に関連の研究資料を収集する。
 - ①各班が予算内で資料の購入を計画し、実施する。
 - ②収集資料を学生教職員等の利用に広く供せるよう、本学中央図書館と交渉する。
- (7) 研究所のウェブサイトなどを介した、研究情報発信を充実する。

- ①ウェブサイトでの日英語による発信を推進する。
- ②実施した講演などのオンデマンドでの配信を積極的に行う。

3. 研究の成果

- (1) 現代を生きるムスリムたちの公共性概念を焦点とした地域研究の推進について事例研究を進め議論を深めた。とくに、伝統的な概念と近代に導入された概念の対立と融和の動態の複雑さが注目を集めるとともに、世俗的な公共性もイスラーム的な公共性も、ともするとナショナリズムに絡め取られていく、現代のムスリム諸国の事情が明らかになりつつある。
 - ①大衆イスラームの展開を主題とするA班は、スーフイズムと結びついた穏健派イスラームの台頭をめぐる研究会（6月11日、11月12日）、研究協力者1名（他に別資金により研究分担者2名、研究協力者3名）をフランスに派遣して国際ワークショップを開催（9月）スーフイズムの市民運動的な展開に冠する研究発表を重ねた研究合宿（2024年3月22日～23日）を行い、スーフイズムが試行錯誤しつつも、新たな形をとって現代的公共性を獲得しつつあることを明らかにした。国際ワークショップの成果は2024年度に刊行の予定である。
 - ②経済と社会の面での公共性に着目するB班は、フランスから1名を招聘し（5月）、昨年度から継続のヨルダン等での女性の公共圏進出に関する共同研究を受けた国際セミナー3回を実施し、その成果をSIAS Lecturesの第10号（英文論集、出版物⑧）として刊行した。その他、モロッコ地震を事例として、自然災害対応における公共性の発揮を主題とする研究会（10月10日）を開催し、これを含めて2024年度に共同研究を加速することとした。
 - ③政治面での公共性を論ずるC班は、オランダから1名を招聘し（2024年2月）、クルドを事例に伝統的公共性と近代的公共性の相克と融合をめぐる国際セミナー3回を開催し、その成果はSIAS Lecturesの第13号として2024年度に刊行の予定で準備を進めている。
 - ④研究所経常予算、別外部資金等も援用し、スウェーデン（8月）、トルコ（2名、研究協力者を含め計3名、8月）、フランス（3名、研究協力者を含め計6名、9月）、トルコ（2024年2月）、エジプト（2月）、セネガル（2～3月）、エジプト（2～3月）、フィリピン（2～3月）、カンボジアおよびベトナム（3月）、サウジアラビア（3月）でそれぞれの地域で注目すべきと思われるイスラーム的公共性の発揮をめぐる現地調査10件を実施した。2024年度以降に研究成果公開が予定される一方、継続調査については別途資金の手当を行う必要がある。
- (2) イスラーム地域研究の継承と発展については、スウェーデン、フィリピン、カンボジア、ベトナムと行ったムスリムが少数派である地域での調査実施を含め、上述（1）の一部も成果として挙げられるが、研究内容の社会還元に向けた活動として下記が言及に値する。
 - ①SORW 2023の企画として、オンデマンド連続講演会「イスラームにおける聖性の継承：預言者、聖者の血統と聖遺物」を11～12月に開催した。実施講演数は4本であり、総視聴数は450強となった。
 - ②SORW 2023の企画として、上智大学アジア文化研究所との共催により、イスラーム関連の解説付き映画上映会を11月に実施した。参加者数は約90名だった。
 - ③昨年度のSORW 2022の公開シンポジウムの内容をまとめてSIAS Lecturesの第11号（論集、出版物①）として刊行し、また昨年度刊行の第7号および第9号を、大学リポジトリ上で公開した。これらは大学の授業の副読本などとして教材利用されている。
 - ④別資金により研究分担者2名（他に別資金により研究協力者1名）をイスタンブールに派遣し（8月）、専門家以外に広く開かれた国際シンポジウム1回を開催した。一般の来場者数は約100名だった。
- (3) 上智大学を舞台に、諸宗教の調和に向けたイスラーム地域研究所の機能の充実と他機関との連携強化については、下記が成果として挙げられる。
 - ①若手研究者を中心に研究協力者をふやし、共同研究への主立った参画者として共同研究所員1名、名誉所員2名を増員し、2024年度に向けて客員所員1名の採用を手続きした。
 - ②配付申請書に記載の金額により、当該分野の書籍21冊を購入し、大学中央図書館での利用に向けて準備を進め、研究所のウェブサイトなどを介した、日英語による研究情報発信を充実させた。
 - ③学内ではアジア文化研究所とよく連携し、学外では研究協定を結ぶ京都大学ケナン・リファーマー・スーフイズム研究センターとは多くの取組を通して国内外で共催などを行った。国際的には、ウスキュダル大学スーフイズム研究所、フランス国立社会調査セン

ター宗教社会ライシテ班と連携を深めてそれぞれ国際シンポジウムと国際ワークショップ各1件を共催した。その他、京都大学人文科学研究所、京都産業大学国際関係学部、東京大学中東地域研究センター、フランス国立社会調査センター中世イスラーム班、コレージュ・ド・フランス・オスマン研究センターとの連携機会も得た。

4. 研究の反省・考察

- (1) 研究班の連携は緊密で研究会、研究合宿等の実施は前年度と同様でおおむね着実だった。
 - ① 研究班を超えて、全体の研究集会の実施を年度途中から企図したが実施にいたらなかった。
- (2) 現地調査の実施は前年度に比して格段に活発に行われた。
 - ① 夏期にも複数の調査が実施されたが、実施時期が年度末に偏る傾向は前年度と同様だった。
- (3) 予定以上に多数の国際セミナー、ワークショップ、シンポジウム等を実施できた。
 - ① 招聘、派遣双方での実施ができ、連携機関と研究協力協定締結への動きも作り出せた。
- (4) 公開講演会等を開催して研究の周知と成果の還元を行えた。
 - ① SORW 2023で2件の催しを実施でき、本研究とその実施主体である上智大学イスラーム地域研究所の活動を広く周知できた。
- (5) 国際会議での部会発表は果たせなかったが、成果刊行は日英語で行った。
 - ① WOCMES 2023は結局中止となり、年度内に代替の国際会議での部会を組織することはできなかった。WOCMESについては、現在、再開に向けた協議への参加を検討している。
 - ② 論集SIAS Occasional Papersでの成果刊行は2024年度に繰り越された。
 - ③ 講演録SIAS Lecturesは予定を上回って2冊を刊行した。
 - ④ 最終的な成果の刊行については、本研究の2024年度の配布申請が不採択に終わったため、2025年度以降に別途の資金獲得などによって研究継続と併せ、企図することとなった。
- (6) 関連の研究資料の収集は予定通りに行ったが、図書館で広く学生、教職員の利用に供するにはいたらなかった。
 - ① 資料の中央図書館での配架については、2024年度に交渉が繰り越された。
- (7) 研究所のウェブサイトなどを介した、研究情報発信を充実した。
 - ① ウェブサイトでの日英語による発信は安定的に展開された。

5. 研究発表

- (1) 学会誌等
 - ① 赤堀雅幸「中東民族誌の四半世紀を振り返る」『社会人類学年報』49巻、35-57頁、2023年12月
 - ② 井堂有子・岩崎えり奈「エジプトの食糧不安：対外依存と都市の脆弱層、食糧補助金制度を中心に」『アジア・アフリカ研究』63巻3号、2-24頁、2023年7月
 - ③ 久志本裕子「東南アジアのイスラームを通じて偏見・差別の構造を考える：『穏健』で終わらないための概念型の講義設計」『上智アジア学』41号、101-126頁、2023年12月
 - ④ 澤江史子「イスラモフォビアを日本で自分事にする補助線：西洋中心主義的な認識論的三層構造と日仏のポストコロニアルな経験から考える」『上智アジア学』41号、11-39頁、2023年12月
 - ⑤ 辻上奈美江「ビジョン2030とコロナ禍でサウジ女性のビジネスと女性はどう変わったか」『中東協力センターニュース』48巻5号、16-27頁、2023年8月
 - ⑥ 湯浅剛「ウクライナ戦争開始後のロシアによる中央アジアへのアプローチ：変質する『旧宗主国』の役割とリソース」『国際問題』717号、35-43頁、2024年2月
 - ⑦ Kashiwagi Kenichi and Iwasaki Erina, “Industrial Linkage, Vertical Integration and Firm Performance: Evidence from Textile and Garment Industry in Egypt,” *Quality and Quantity* vol. 58 no. 1, DOI: 10.1007/s11135-023-01667-y, February 2024
 - ⑧ Kushimoto Hiroko, “Tackling Prejudice against Islam in Japanese University Education: Identifying Key Concepts,” *International Conference of Languages Education and Tourism 2023 e-Proceedings*, August 2023
- (2) 口頭発表
 - ① 久志本裕子「マレー・ムスリムにとっての心身の癒しとイスラーム：『共にいること』の重要性」日本マレーシア学会第32回研究大会、東京大学、2024年1月21日

- ② Akahori Masayuki, “Reviewing Anthropology of Sufism: Changing Perspectives,” ISS International Symposium, “Bridging Mystical Philosophy and Arts in Sufism: Poetry, Music and Sama’ Ritual,” Uskudar University, Istanbul, August 28, 2023
- ③ Inaba Nanako, “Resistance of Undocumented Migrants in Immigration Detention Centers in Japan,” 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies, Ghent University, August 18, 2023
- ④ Iwasaki Erina, “Challenges of Water Sustainability in New Valley, Egypt,” Challenges and Solutions for Global Water Scarcity; 1st Workshop (Egypt), Cairo, August 22, 2023
- ⑤ Iwasaki Erina, “Groundwater Development in Kharga Oasis, Western Desert (Egypt) in the Era of Neoliberalism,” 7th Symposium for the Enhancement of Egypt-Japan Joint Research Projects in Egypt, Cairo, December 27, 2023
- ⑥ Iwasaki Erina, M. Hagage and S. Elbeih, “The Relationship between Water Resources, Land Use, and Socioeconomic Changes in Kharga Oasis, Western Desert (Egypt),” 2nd International Conference on Water Resources Management and Sustainability, Marriott Hotel Al Jaddaf, Dubai, February 26, 2024
- ⑦ Kushimoto Hiroko and Noor Azmira binti Amran, “Socio-Cultural Contexts of Reverse Gender Gap in Higher Education in Malaysia,” International Workshop “Better Together: Female Alliance & Empowerment in Contemporary Malaysia,” Kyoto University, July 26, 2023
- ⑧ Kushimoto Hiroko, “Tackling Prejudice against Islam in Japanese University Education: Identifying Key Concepts,” International Conference on Language, Education and Tourism, International Islamic University Malaysia, Pagoh, August 8, 2023
- ⑨ Tonaga Yasushi, “Arts of Literature, Music and Rituals in Buddhism,” ISS International Symposium, “Bridging Mystical Philosophy and Arts in Sufism: Poetry, Music and Sama’ Ritual,” Uskudar University, Istanbul, August 28, 2023
- ⑩ Tsujiigami Namie, “How Haram Becomes Halal: Gendered Impact of Social Change in Saudi Arabia,” Middle East Studies Association, Montréal Convention Centre, November 4, 2023
- ⑪ Yamaguchi Akihiko, “Urban Evolution in Iranian Kurdistan during the Early Modern Era: Shift from Mountain Strongholds to Flatland Cities,” Online Lecture at the Section of Kurdish Studies of the Jagiellonian University, October 17, 2023
- (3) 出版物
- ① 赤堀雅幸編『スーフイズムにみる音と身体の技法』SIAS Lectures 11、上智大学イスラーム地域研究所、2024年3月
- ② ハイメ・タカシ・タカハシ、エドゥアルド・アサト、樋口直人、小波津ホセ、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス、稲葉奈々子、オチャンテ・カルロス『ペルーから日本へのデカセギ30年史：Peruanos en Japón, pasado y presente』インパクト出版会、2024年2月
- ③ 岸見太一、高谷幸、稲葉奈々子『入管を問う：現代日本における移民の収容と抵抗』人文書院、2023年7月
- ④ 長沢栄治監修、岩崎えり奈、岡戸真幸編『労働の理念と現実』イスラーム・ジェンダー・スタディーズ、明石書店、2024年3月
- ⑤ 久志本裕子、野中葉編『東南アジアのイスラームを知るための64章』エリア・スタディーズ、明石書店、2023年4月
- ⑥ 辻上奈美江「イスラームとジェンダー：湾岸地域を中心に」長沢栄治、後藤絵美編『東大塾現代イスラーム講義』東京大学出版会、2023年9月
- ⑦ 東長靖「神秘体験とその表現：エリートと民衆、個人と組織のあいだ」赤堀雅幸編『スーフイズムにみる音と身体の技法』SIAS Lectures 11、上智大学イスラーム地域研究所、2024年
- ⑧ Myriam Ababsa, *Land Inheritance, Notability and City Governance in the Middle East: Cases from Raqqa and Amman*, SIAS Lectures 10, Tokyo: Institute of Islamic Area Studies, Sophia University, March, 2024